

横浜市芸術文化振興財団 専門人材育成研修レポート

日程：2019年11月26日

場所：横浜美術館

対象：横浜市芸術文化振興財団の専門職員

参加人数：約45名

講師：福のり子（京都造形芸術大学教授 同アート・コミュニケーション研究センター所長）

レポート担当者：北川裕介（横浜美術館 鑑賞エデュケーター/学芸員）

対話型鑑賞を行うことで育まれる学びについて、鑑賞法が生まれた経緯から京都造形芸術大学のアート・プロデュース学科で行われている授業、Art COmmunication Project（以下 ACOP）での実践に至るまで、非常に説得力のある話をしていただいた。特に興味深かったのは、ACOPの学生が「ACOP 症候群」にかかるという話であった。対話型鑑賞について学ぶ過程で、ある学生は「信号待ちをしていたら信号の色が赤から青に変わった。しかしなぜ青に変わったのかを考えているうちに、また信号が赤に変わってしまい横断歩道を渡れなくなっていた。」と、ACOP 症候群にかかると日常生活にも変化が及ぶと言うエピソードであった。しかし、この話は少々根が深い問題を抱えているように思われる。信号機に限らず、どんな物でも、どうしてその形なのか、色なのか、その場所にあるのか等の疑問をあげたら際限がない。視野が広がることで、自発的な思考を促した良い例のようにも捉えられるが、信号機について考えた学生は「困った、生きづらい」と感じたようだ。確かに、考えなくてもいい事を考えるのは本来とても面倒なことだ。対話型鑑賞では他者とファシリテーターがいるので、思考が飛躍し過ぎる事はなく、ある種のコントロールされた状況にある。しかし一步外に出てしまえば1人で考えなければならず、時には考え過ぎてしまう。日常においても仕事においても、深く考えるということは生きるために必要な力である一方「生きづらさ」を抱えてしまうこともある。この問題は鑑賞法そのものを理解し身に付けることで解決ができる。むしろ、それこそが最大の目的でもあるが、長期的な学習によって身に付くものであり、美術館で行う時間が限られたプログラムでは風呂敷を広げるだけで「生きづらさ」を生む原因になる可能性も大いにある。

さらに、作品を使って学習を行うとなった時に、作品の解釈はどこまで自由なのかという疑問が生まれる。対話型鑑賞で作品を見る場合、観察に基づいた情報に根拠をおいているが、基本的には想像や仮定で話が進んでいく。その作品が何であるかよりも、考えるプロセスや広がり的重要としているからだ。一方、想像や仮定に終始してしまえば、そこには誤解や思い込みも多く含まれたままになってしまう。作品の見かたに正解や不正解はなくとも、作品の背景を無視することで生まれる誤解は可能な限り避けたいところである。対話型鑑賞を行う際に作品の情報を入れるべきかについて多くの議論が為されてきた事からもわかる通り、「学び」と「作品の理解」どちらを優先させるか、またはバランスの取りかたは非常に

慎重にならざるを得ず、美術館で対話型鑑賞が敬遠される1つの要因でもあると思われる。

対話型鑑賞は、生きる力をつける為に優れたプログラムである事に疑う余地はなく、作品との相乗効果による可能性は計り知れない。しかし、だからこそ美術館のプログラムとして十分に普及に至っていない要因を改めて見直し、次のフェーズに移りつつあるこの鑑賞法が、よりブラッシュアップされたものになればと、僭越ながら今回の研修を経て気になった点をあげさせていただいた。